

何のために勉強するのですか？

10年前、アメリカ合衆国バージニア州からホームステイで我が家に来てきたアリソン（16歳）は、学校には毎日通っていませんでした。不登校でも何でもなく、バージニア州は、登校して学ぶと決められたこと以外は、家庭で学ぶことを選択してもよいというカリキュラムが整備されていました。家庭では母親（ホームティーチャー）が娘の学習のお世話をしていたそうです。

コロナ禍で、日本は、ICT教育後進国の汚名を晴らすべく、「GIGA（ギガ）スクール構想」の推進に拍車をかけました。政府は、補助金をばらまいて、一人一台端末の整備を進め、椎葉村も瞬間に実現しました。臨時休校等で「子ども達の貴重な学びを止めてはならない」というのが大きな目的ですが、学校にどうしても馴染めないという子ども達にとっては、端末を利用したネット学習が今後選択肢の一つになっていくのではないかとされています。

「アフターコロナ」の世の中はどうなっていくのでしょうか。

「コロナ前には戻らない」という意見、「対面のよさが再認識された」という意見、コロナ対応もそうですが、まさに正解のない中で、様々な考えがあることを認めつつ、誰もが「そこは了承できる」という納得解を見つけしていく作業が必要になることは間違いなさそうです。

さて、「何のために勉強するのですか？」という問いの答えはどんなものがあるのでしょうか？そして、納得解は何になるのでしょうか？くれぐれも、勉強をする主語は子どもだけではないことは共通認識として捉えておくべきかと思います。



【学ぶ先生達】

答え その1

朝がくると まど・みちお

朝がくると たび起きて

ぼくが作ったものでもない 水道で顔をあらうと

ぼくが作ったものでもない 洋服を着て

ぼくが作ったものでもない ごはんをむしゃむしゃたべる

それから ぼくが作ったものでもない 本やノートを

ぼくが作ったものでもない ランドセルにつめて背中にしよって

たったか たったか でかけていく

ああ なんのために

いまに おとなになったら ぼくだって ぼくだって

なにかを 作る事が できるように なるために

答え その2

ノーベル賞作家大江健三郎氏の話です。

大江さんの長男・光さんは知的障がいがありました。光さんは7歳になると、特殊学級（現在の特別支援学級）に入学しました。光さんは、音に大変敏感な少年でした。

ある日、父健三郎氏は息子の教室を覗きました。そこでは、光さんは両手で耳を塞いで、体を固くして過ごしていたそうです。健三郎さんは「光はなぜ学校に行かねばならないのか。障がいは一生涯治らないのだ。野鳥の声を聞き分け、鳥の名前を親に教えるのが好きなのだから、自然の中で親子三人、暮らせばいいのではないかと考えたそうです。

しばらくして光さんは、自分と同じように騒がしい音を嫌う友達を教室に見つけました。光さんはその子に寄り添うようになり、休み時間には一緒に耳を塞いだそうです。そして、身体能力が自分よりも低いその友達のために、トイレにも付き添ってあげるようになりました。これまで母に頼って生活してきた光さんにとって（自分が友達のために役立っている。）という思いは新鮮な喜びとして感じられたようです。

その後、光さんは音楽と出会い、13歳の時から作曲をはじめ、作曲家になっていきました。健三郎さんは言います。

「光にとって音楽は、自分が社会とつながっていくための一番役に立つ『言葉』です。国語も理科も算数も体育も、自分をしっかりと理解し、他の人とつながっていくための『言葉』です。そのことを習うために、いつの世の中でも子供は学校へ行くのです。」

「何のために勉強するのですか？」

答えはたくさんあるでしょう。まだ子供が幼く、そんなことは思いませんし、もしかしたら、「俺ん子だから、勉強は嫌いなはず！」なんて決め込んで可能性を潰してはいけません。

「勉強」と思っていないだけで、大人も仕事や生活で日々学び続けていることも確かです。

「『生きる』ということは『学ぶ』ということである」と言った先人もいます。私たち大人の使命は、子ども達に「学ぶことは喜びである」ことを伝えていくことではないでしょうか。



【個に応じた指導】

見方を変えると、意識も変わる

「目先の悩みなんか、天文学的に考えたら取るに足らない」

「人類の歴史に照らすと、今の営みなんて一瞬にも足らない」

要は、細かいことに捕らわれ過ぎてはならない、時に広い視野で物事を見ることも必要であるという先人の教えですね。

私たち教員は、生徒指導の極意として、「子ども達を多面的に理解すること」に努めています。「優柔不断」という性格は「受容する心がある」「思慮深い」と見方を変えることができます。また、クラスでは物静かでも、時・場・相手が変われば雄弁に話している子供もいます。

子ども達には、「『私はこうだ、あの子はこうだ』という決めつけをするのは止めましょう」と指導しています。私自身もそうでしたが、現在人前で話したり、先頭に立って仕切られたりしている方の多くは、「小さい頃はとても大人しく、もじもじしている子でした。」と聞きます。「幼い頃からずっと一緒だったから、もう全て知り尽くしている。」のかもしれませんが、これからの未来、成長は知らないはずで。

ドローンやスマホは私達が見る世界を大きく変え、考え方で変えています。「物事に絶対はない」と言います。柔らかく寛容な感性で、日々を過ごす、別のものが見えてきます。